Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷　聡『民芸運動と建築』
Author(s)	山形, 政昭
Citation	デザイン理論. 2011, 58, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53394
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷　聡
『民芸運動と建築』

淡交社　2010年

山形政昭／大阪芸術大学

本書は書名のように，大正〜昭和にかけて，柳宗悦を中心に展開された民芸運動と関連して生み出された建築，ここで言う「民芸の建築」の来歴を明らかにし，そして代表的建築を幅広く紹介し論じられたものである。

必要にして十分な枚数の魅力的なカラー図版が収められており，一見民芸建築集のようであるが，本書の編集と序論を担当された藤田治彦氏の「民芸運動と建築」を読み進むや，これは単なる図録ではない，画期的な民芸建築論であることが分かる。つまり，「民芸の建築」が追求した理念と，表現された世界の意味が様々な観点から述べられ解明されているのである。

ところで藤田氏はアーツ・アンド・クラフツの研究に関連して，かなり以前より「民芸」に触れてこられたことはよく知られているが，とりわけ編集執筆を担われた『アーツ・アンド・クラフツと日本』（思文閣出版，2004年）では第２部に「民芸運動とその周辺」を置き，各テーマに沿った執筆人による論説を集め，日本デザイン史における民芸運動の位置づけが試みられている。

一方，気鋭の建築史家である川島智生氏が近代の民家に注目されたのが何時からなのか定かでないが，我国最初の民芸館と目されていた三国荘の現存を確認され報じられたのが1998年のことで，民藝館の復原が2005年のヴィクトリア＆アルバート美術館による企画展「インターナショナル・アーツ・アンド・クラフツ展」において実現され，それが2008年の「生活と芸術－アーツ＆クラフツ展　ウイリアム・モリスから民芸まで」（京都国立近代美術館）にて巡回展示され，広く関心を惹いていた。

また京都を中心に研究されている石川祐一氏は「河井寛次郎の建築意匠」（『デザイン理論』46，2005年）等で発表し，また河井に師事しその後多くの建築を手掛けた上田恒次の仕事に光を当てるなど，近代における民家・民芸の建築研究に成果を上げている。このように21世紀に入り，関西での「民芸の建築」「近代の民家」研究が進められており，それらの成果を背景に本書が企画されたことが分かる。

さて，巻頭におけるかなり長大な序論「民芸運動と建築」では「民芸の建築」の特質について主に３つの側面から論じられている。その第一には民芸建築を推進したパトロン，とりわけ大礼記念博覧会における民藝館の建設を実現させた工政会の倉橋藤治郎の活動に着目し，当時の工業化時代における工芸の位置が深く考察されていることである。

次に，大正中期より始まるとされる民家調査，民家研究と「民芸の建築」についての言及である。民家研究の成果には今和次郎の『日本の民家』（1922年）を初めとして，昭和初期における『民家圖集』の刊行などにて民家への関心は広がり，戦後には文化財としての民家の評価が進む。一方「民芸の建築」では『民芸建築図集』（1958年）などあるが，本来の住宅建築とは類の異なる美的趣味としての民芸風建築として受容されてきたという。つまり，両者とも歴史的民家とそこでの生活様式をルーツとしながら，着目点の相違を近年まで残してきたことに気づかされる。そう

したなかで，今の民家研究における田園都市論など英国の影響が認められるという近代的な視点の所在など，現在でも再考を要する指摘がなされていることである。

第３は「民芸の建築」の特質に関して「おわりに ── 建築と自然 ──」で述べられているところで，自然環境，歴史に培われた生活環境との関係に基づく建築観に着目し，「西洋に発する合理主義の近代建築にはない，日本あるいはアジアからの世界の建築へのメッセージである」という。「民芸の建築」の独自性について工業化を推進した近代デザインの本質的な課題のなかで評価された，藤田氏の眼差しに驚かされるのである。

この序論につづき，十数件の民芸の建築を４名の執筆者が分担し詳しく解説している。そこでは先に触れた建築史の分野より「民芸の建築」に着目された川島氏，石川氏が建築意匠と空間を中心に論述されているのに対し，地域文化論の観点から益子における濱田庄司邸を担当された濱田琢司氏の解説，そして近代工芸史を専門とされる猪谷聡氏の解説など，夫々に着目点が豊富で読み応えがある。そして，京都における上田恒次，松本における安川慶一，静岡における高林兵衛ら，「民芸の建築」設計に関わり，夫々の地域に固有の空間を残した建築設計者の活動が掘り起こされていることなど注目される。

これらの各論を通して興味深く感じたことの一つを述べておきたい。

「民芸の建築」に見るバイブリッドな性格である。柳による日本民藝館（1936年）や，濱田が中心となり河井ら民藝同人が協力したという式場隆三郎邸（1939年）に顕著なように，木造民家の手法による和の表現を示しながら，洋風使い，洋風の空間構成をとり，さらには暖炉の設備，朝鮮の伝統的意匠やウインザーチェアー等の参入があり，加えて日常に供する雑器を含めて響きあう調和的世界が形成されているのである。それらが「民芸の建築」の名作としての評価を得てきたことにより，こうした混成的表現が「民芸の建築」の特質とみられると同時に，それらが街中のポピュラーな建築に流布する要因であったとも指摘されていることである。ともあれ日本における近代建築史上で，装飾を排したモダニズムの建築が主流を形成しつつある時期において，こうした特色ある「民芸の建築」が成立していたことである。近代における和風建築の展開は，和風＋洋風技術，間取りの合理化，近代数寄屋等により語られてきたのであるが，加えて民芸の建築という領域が本書によって認められるのである。

おわりに，本書巻末には「全国の民芸運動関連の建築」案内が付されており，見学等に際してまことに便利な資料となっている。